

# 私の日本紀行

## アンヌ・ゴノン

(大学言語文化教育研究センター教授)

ヨーロッパ人にとっては歴史上の、第一の旅は「オデュッセイア」のそれで、第一の旅人はユリシース（オデュッセウス）である。ホメロスの主人公のように、旅人は自分の国を出て、知らない国を遍歴し、その辛い経験のなかで、他の国々、他の人々に出会い、その出会いから学んだことを物語る。「考察」を意味するフランス語“regard”はまず自分自身の目で見ることを意味する。自分の目で観て、知ったことこそは本当の知識として、貴重な事実として認めるに値する。同時に、他の世界を知るだけではなく、その旅の経験において、自分を、一個人としての自分を、しかも一族の一人としての自分を知るのである。ユリシースはイタケーの人として、ギリシャ人として自分がどのような人間であるか、しかも対照的に、ギリシャでない世界をも知ったのである。その時以来、ヨーロッパ人は知るために旅行にでかけた。フランスの文学に目を向ければ、どの時代にも、そのような哲学的な意味を持った旅への憧憬につき動かされて旅に出かけた有名な文学者は少なくなかった。例えば、モンテーニュ、スタンダール、モンテスキュー、フローベ

ールなどである。人々はまず、フランスの近くにあるイタリア、スペイン、次にギリシャに心を向け、自分の文化を生み出した古代文化を知ろうと思ったが、その傾向は次第に拡大され、十八世紀、十九世紀の航海の時代を経て、植民地化の動向の中で、エジプトを始め、東洋にも関心は広がったのである。サイドはその関心を“Exotisme”と呼んだ。ヨーロッパ人は経済、産業の発展した中で、自信をいだくともにも、世界を旅行することの意味は一変した。旅は哲学的な意味を失い、そのかわりに、他国を知ることがは商売のため、経済発展のため、国家間競争のため、いわば世界を支配するための覇権的なものになってしまった。他の国を知る喜びよりも、自分の力を他の国の人々に感じさせ、他国を利用しようとする意図が凌駕してしまったのである。

### 一 日本と“Exotisme”

この拙文に直接にかかわっている日本もその“Exotisme”の中に取りこまれてしまった。長いあいだ鎖国していた日本はヨーロッパ人の想像の世界に、あまりにも神秘的な国となって存

在していた。もちろん、正確な情報は少なかったので、変なイメージが溢れていた。統一のあるイメージはなかった。マルコポーロのいわゆるジパング、漆器、陶器、版画などによって日本のイメージは様々であった。そのためか、ようやく十九世紀から日本へ旅行することができるようになって、日本を訪れたヨーロッパ人はまず、好奇心をもって、日本をみようとした。

しかし、自分の文化からはるか遠く離れた極東・日本の文化との出会いは難しく、苦しく、物された旅行記は、日本の事実を紹介すると同時に、あまりにも異邦人である西洋人としての自分の見方が、逆に大きく反映したものになっている。日本の風俗をむやみに批判したりして、誤解は多い。現在も、東洋に対するイメージの中で日本は特別な位置を占めている。一方では、東洋に属している日本は西洋と違うべきであるが、他方では、西欧化の途上国として日本は西洋的でなければならぬと言う矛盾を孕んだ見方がヨーロッパ人の心の内に潜んでいる。

私はこのようなヨーロッパ中心の精神的風土の中で育てられた。私も日本についての“Exotisme”をもっている。それを得たのは文章からではなく、すべて絵からだ。バラバラだが、小さいとき、母の日に、学校で日本風の花鳥の絵を描いて母にプレゼントした憶えがある（もちろん当時、それが日本風の絵だとは分っていないかったのだが）。大人になってから日本の映画―黒沢明、溝口健二などの映画―、版画などによって私の日本観は作られた。そのなかで、特に二つの絵が印象的な影響を与えたことを覚えていいる。まず、一冊の写真集があった。その題名を正確に覚えていないが、すばらしい本だった。日本語とその

英語訳とによる芭蕉の俳句に、有名なイギリス人の写真家(Dennis Stock)による写真が添えられていた。俳句、書道と日本の風景とが並んでいた。もうひとつの写真はフランス語のEncyclopaedia Universalisの日本という項目に入っていた。それは唐招提寺に安置されている鑑真の像の写真であった。静かな顔や態度をしているそのお坊さんの彫刻は私にとって人間の完璧な姿だと思われた。

私は感動して、日本に行くチャンスがあれば、鑑真の尊いお姿を拝したい、芭蕉の「奥の細道」をこの足で歩きたいと漂泊の思いに駆られた。それは私が自分と交わした密かな約束であった。

## 二・湖北の十一面観音

日本に来て十年たった。鑑真の彫刻を見ることはできたが、陸奥への旅をまだ実現できないでいる。道祖神の親切なお招きはまだない。京都に住んでいる私は日本をもうエキゾチックな空間としては見られなくなり、私の日常的な生活空間としてここに暮らしている。私は何のために日本に来たのか、忙しさに明け暮れる日々がつづく、時々ふと不安を感じて自分に問う。日本料理を食べていても、日本語で毎日話していても、私は日本人ではないことを忘れてはいけなさと内心いつも考え続けている。そうしないと、わざわざ日本に来た自分の、人生の大きな変化の意味を見失うだろう。故里の繫縛を超えて多様性の中に生きたいという願い、自分の世界観を広げ、自分の文化の限界を乗り越えたいという願い、ヨーロッパ文化と日本文化との境界に身を置きたいという願いが私を駆り立てたのだ。

だが、私の生活の中で私の初志は、フランスの文学者、Victor Segalen の定義した“Exotisme”は「*へ行*ったのか、それは旅の中にあると私は感じている。

日本に来て良かったという気持ちを取り戻すために、そしてもう一度人生の大きな曲り角を感じるために、私は旅に出かける必要があった。しかし、温泉へ行くことか、観光地を訪問することなどではない。それは仏教寺院を訪ねる旅である。奈良、九州などお寺を歩き回ったことがあるのだが、もっとも自分の気分に応えた旅は近江路で見出した。なぜ近江は私にそれほど強い印象を与えたのか。近江路を辿る旅は歴史の旅である。歴史や文化の違いで育てられた私にはそこに異国、フランス語で言う *dépaysement* をもう一度体験できる。ここではしかし、一人の異邦人として感ずるその奇妙さと同時に、



渡岸寺十一面観音立像

この世のあらゆる限定を超えた「美」と出会い、美の持つ普遍性を感じ得るのである。そのような矛盾した気持ちをもっとも強く感じたのは、湖北の十一面観音の前においてであった。矛盾があるから否定されるのではない。矛盾は矛盾としてなくなることはないが、そのまま異邦人としての私を包むような慈愛に満ちた「美」がそこにはある。

京都駅で乗った電車は米原までとても混んでいたが、そのあと次第に乗客はまばらになった。湖北の田舎の小さい駅に次々電車はとまる。そこに旅行のはじまりがあった。急がない、急がない。三月の天気はまだあまりに寂しい。特別美しくはない風景だが、旅情を揺さぶる。二日間の旅の第一の目的地は高月町。駅にタクシーはないので、車が猛スピードで走る自動車道路の脇を歩いて、村の中では私達は何回も道に迷いながら、ゆっくり散歩を楽しんで、やっと渡岸寺についた。そのお寺は別名向源寺という。お寺は有名な仏様が安置されているとは信じられないほど、静かなたずまいを見せている。日本のお寺はキリスト教の教会と全く異なっている。教会は殆ど道路に沿って建てられているので、聖なる空間に入ったという印象はその建物に入ってから、教会内部の高い天井、ひんやりした冷氣、ステンンドグラスを透るほどの暗い光、お祈りする人たちの静寂を感じて初めて味わうことになる。仏教のお寺とは違う。お寺の山門を通って本堂まで道は遠い。境内の大きな樹木、鳥たちの声を聴きながら歩いて、自然に気持ちは和らぐ。山門をくぐって境内に入ればそこに聖なる空間の経験がはじまる。教会と違うのはまさしくこの点だ。渡岸寺の場合は、仁王門から観音堂

へと桜木と石畳がつづく静寂な境内が広がっている。本堂には阿弥陀如来と大日如来も安置されている。しかし私はその十一面観音を眺めるために来たのだ。ガイドブックには、「聖武天皇の天平八年、当時都に疱瘡が大流行し死者が相次いだので、僧泰澄は除災の勅を奉じ、その祈願を込めて十一面観世音を彫み、一字を建立したと伝えられる」という。

十一面観音立像は高さ百九十五センチの、平安初期の仏像である。頂上仏・化仏・瓔珞を別木とする檜一木造りだ。十一の小面をもつ変化観音。その十一面は前が菩薩の慈悲相、左三面が瞋怒面、右三面狗牙上出相、後二面暴悪大笑相という。その豊かな顔容には崇高な森厳さが秘められていた。全体に面長の顔立ちで軽く腰を左に捻り、長く垂らした右手が上半身を安定させている。観音様は右手に壺をもっている。大慈大悲心をもつて、苦悩の人間を救う観音像の美しさに感動させられた。お寺を出たあとしばらく高月町を立ち去ることはできなかった。仏像の魅力から離れられなかった。お寺の隣の小さな店で食事をし、その東側にある観音の里歴史民俗資料館を見たりした。夕方、やっと隣の街、木之本町へ着いた。次の朝、雨は降り出した。雨の中二つのお寺を訪れた。己高閣と石道寺。そのお寺は山の中にある。二軒のお寺はこの地域の戦乱と明治時代の廃仏棄釈などによって衰退したお寺の仏像を預かるようになっていた。己高閣には鶏足寺の十一面観音の像を収蔵していたという。己高閣には鶏足寺の十一面観音の像を収蔵している。雨の中に緑の薫りが強く感じられる大きな森の檜の「世代閣」には立派な仏像が保存されている。簡素なお堂に木造薬師如来立像、魚籃（びく）を左手にもつ魚籃観音。それは珍しい

像容だが、琵琶湖の豊漁を祈願して作られたものだろう。右手には蓮華の花をもつ。木造十一面観音も安置され、それは鶏足寺の本尊として祀られていた。面長の顔は気高く个性的で、檜の一木作りの優しい姿には、衣文などが素材に美しく刻まれている。左手に鉄あるいは金属の壺をもつ。つぎに、石道寺へ移った。タクシーを降りてから畑の中の急な坂道を上らなければならなかった。石道寺は高い所にある。そこに本堂と十一面観音があった。その場所を守りつづけるのは親切なお爺さんである。彼は私達の願いに応えて本堂を開けた。本堂の奥に十一面観音が安置され、観音を眺めるには懐中電灯の光が必要であった。観音はうす暗い陰の中から私達を呼びよせているかのようだった。観音の姿だけが薄暗がりの中に浮き出る。優しく微笑みをたたえた口許の口紅がくつきり目立つので、艶やかでしかも神秘的な雰囲気があった。

僅か二日の間に、いまはもうその名が忘れ去られた仏師によって刻まれた、数えられないほど沢山の美しい仏像を眺めることができた。この地域―琵琶湖の周辺は人々の深い宗教心と美術的感覚とを今に残している。村のあちこちに太い幹の老木が残っている。歳を経て堂々とした姿で人間の営みを見つづけて来たに違いない老木の幹からは、いつでも観音様の御姿があらわれるのではないか、という思いがしきりにする。湖北は素晴らしい故里だ。

私は十一面観音を眺めたおかげで、私にとって理解しにくい世界の広さに触れ、もう一度自分の限界を感じる事ができた。それこそ私の求めている“Exotisme”である。

# アフリカ研究の意義 をアフリカで考える

斎藤文彦

(龍谷大学国際文化学部助教)

84年大学法学部法律学科卒業

本年度私は勤務先の龍谷大学より在外研究を許され、東アフリカの赤道直下の国ウガンダにいる。今回の滞在は九月上旬まで、その主要目的はここで現地調査を実施するためである。

私とウガンダの縁は比較的長く、一九九一年から九三年の間は国連の専門機関の一つである国連開発計画 (United Nations Development Programme, UNDP) の職員として駐在し、また九八年並びに九九年と短期間であるが研究のため訪問している。

ウガンダはケニアの西に位置し、面積は日本の三分の二くらいで、人口は二〇〇〇万を上回っている。アフリカというと半乾燥気候のサバンナが連想されるかも知れないが、この国の中央部は緑豊かで、農業が主要な産業である。ウガンダといえは一九七〇年代のアミン大統領が思い出されるであろうが、現在はムセベニ大統領が国家元首である。課題の多いアフリカ大陸においてムセベニは指導力のある新しい世代のアフリカ人政治家と評され、ヨーロッパ諸国を始め諸外国では評判がたかい。

今回の研究テーマはウガンダにおいて地方分権政策がどのよ

うに実施されており、公共サービスの向上に結びついているかどうかを、事態面から解明し、その意義と限界を明らかにすることにある。そのため、首都カンパラで政策担当者に話を聞くだけではなく、三つの違った地域(日本の県に相当)を訪問し、各種の関係者に面会を求めている。

なぜアフリカにかかわるのか

アフリカ研究の意義を考えるに当たり、あるエピソードを紹介したい。ある有名なアフリカ文学の日本人研究者が、飛行機の中で日本のビジネスマンと隣の席になり、いろいろと話をした。その時そのビジネスマンが、「どうしてアフリカを研究するのですか?」と尋ねたところ、その有名な研究者は思わず絶句してしまい、答えられなかったと言う。内戦と飢餓、政治的不安定と貧困にあえぐアフリカなどビジネスマンにとってはほとんど考える価値のない場所であろう。このエピソードは、一般の日本人のアフリカへの関心とアフリカを研究することの日本

での意義を、大変象徴的に表しているように思われる。

その問いに私ならどう答えるであろうか。私自身は以下のよう  
に思っている。アフリカほど現在の世界の矛盾を体現してい  
る場所はない。人類発祥の地と考えられるこの大陸のほとん  
どの国では、人々は世界でも最も寿命の短い人生を生き  
て、野生動物に象徴されるような豊かな自然が、他方では人間  
とって厳しい生存の場所であり、アフリカの環境破壊は人間の生  
活基盤を脅かしている。

現在のアフリカ大陸を見ると、従来の「未開」なアフリカを  
再現するような出来事に事欠かない。エチオピアと隣国エリト  
リアは二年越しの国境紛争を未だに繰り返している。コンゴで  
はアフリカの多くの諸国が介入した内戦が複雑な様相を呈し、  
休戦協定は結ばれるたびに破られている。シエラレオネでは  
国連の平和維持軍の兵士が反政府軍の捕虜になり、国連の威信  
を低下させた。ジンバブエでは独立以来政権を保ってきたムガ  
ベ政権が白人の土地を強制収容し、混乱を引き起こしている。

これらの諸課題を考えると、あたかもアフリカは本当に問  
題解決能力を持たない場所のように思われる。しかし、世界的  
視野で考えると、二十一世紀の世界が本当に平和で繁栄するた  
めには、アフリカが今のよう貧困と紛争を抱え続けるわけに  
はいかない。エリトリア人の知人がある時に語った以下の言  
葉は意味深長である。私たちは自分の体が病気がどうかを表現  
するとき、病気であるとか無いとか言う。現在の世界は、先進  
国の属する左半身は大変元氣であるが、アフリカの属する右半  
身は瀕死の重傷である、と言うのと大変似た状況にある。それ

なのに、この患者を世界は健康体と「思っている」。すなわちア  
フリカの問題は私たちの問題でもある。

ところが、ご存じのように日本における地域研究の中ではア  
フリカ研究が、普通の人々にとっては恐らく最もなじみがない。  
野生動物の場所として、あるいは前近代的生活を営む人々の地  
域として、アフリカは理解されているのであろう。しかし他方  
で、アフリカ人にとって日本はある意味で大変知られている国  
である。例えば、ウガンダで使われる車のほとんどはトヨタや  
ニッサンである。日本車や日本の電化製品が世界の多くの国で  
重宝されているが、他方文化や社会の面では残念ながら日本と  
アフリカの間の相互理解はあまり進んでいない。日本では例え  
ば東南アジア地域は近年のめざましい経済成長の実績もあり、  
「野蛮な熱帯」の国とはもはやあまり思われていないようであ  
る。その一方で日本の多くの人々はアフリカに対して未だに充  
分な関心を持っていない。

### アフリカでの生活の維持と研究成果

異文化理解における最善の方法の一つは、ホームステイであ  
る。アフリカ人の生活を知る際にもこのことは当てはまる。し  
かしアフリカにおけるホームステイは、先進国はもとより多く  
のアジア諸国の場合と違い、独特の困難をもたらす。端的に言  
えば、生活状況が厳しいので、健康管理が大変である。例えば  
ウガンダ人と同じ食事をし、同じ生活をすれば、ウガンダの人々  
の生活は良く理解できる。そうではあるが、我々もこの人達

と同じように、マラリアにかかり、栄養不足が原因で病気がちになる。厳しい状況の中でがんばりましたと生活の点での自慢はできても、病気になっては研究を含め仕事の成果はあがらない。特に限られた時間の中で、調査をする必要がある研究者の場合など、健康を害すると本人も大変であるが、その研究に協力してくれている方々の迷惑にもなる。このようにホームステイは魅力的ではあるが、他方困った結果をもたらすこともある。実際、私自身も今回ある家庭に一ヶ月ほどお世話になったが、正直言って喜びと苦勞が同居していた。

では一体私は何を研究しているのか。実は私は大学の教員としてはまだ五年目の駆け出しにすぎない。その意味ではこのような早い時期に在外研究の機会を得ることができたことは大変ありがたく、日々いろいろな意味で学問のあり方を改めて考えさせられている。

アフリカの田舎を訪ねながら、私は最近つくづく次のように考えている。研究者ならではの研究とは、冒頭のビジネスマンの質問へのエピソードにもあるように、普通の人から考えれば、一見何の価値もないようなことをこつこつと突き詰め、その意義を解明し、次の世代への教訓とすることではなかるか。

遺伝子の意義を突き止めたある生物学者は、奇形のシヨウジヨウバエと三十年間つきあった。数学者は未だに説けない定理をこれまた何年と考え続ける。私はといえば、観光であれば誰も行かないようなへんびなアフリカの農村を回り、インタビュを繰り返し、また政治家や政府関係者に会い、意見を求める。いずれもビジネスという視点から見れば、本当に「金にならない

い」仕事である。恐らく一見どうしてそのような課題に取り組むことに意味があるのかと、他の人は思うかも知れない。しかし恐らく真理の探究とはとてもなく長い過程であり、辛抱の繰り返しである。そしてその探究が信念に支えられているからこそ、我慢もできるのである。

例えば私にとっては、なぜ地方分権と言うテーマに今取り組み必要があるのか、それをどうしてウガンダで研究する意義があるのか、は明確である必要がある。そうでなければ、目の困難に我慢できなくなる。私としては、分権化は多くの発展途上国で取り組まれている重要な政策課題であるが、これまでの研究が行政機構の改革という視点からなされていたのに対し、今後は実体的な解明が必要であるからである、と考えている。またウガンダはアフリカの中でも早くから分権化に取り組み、未だに多くの課題を抱えているが、一定の成果をあげてきた。実際他のアフリカ諸国がこの地に視察に来る段階にまで至っている。ウガンダの経験から私たちはどのような教訓を学び取ることができるのであるか。それを分かりやすい形で提示することは意義があると考えている。

### 外国人として他の地域や文化を研究する意義

無論いくら努力したとしても、私は所詮外国人にすぎない。ウガンダの人々と同じように、この国のことを理解できるわけではない。一つの例で考えれば、今回の調査では私は主に英語を使っている。なぜなら、私にはウガンダの言葉が話せないから



女性達から地方行政に関して聞き取り調査をしているところ

である。そのため村人との会話には通訳を介さざるをえない。やっかいなのは、私の三つの調査地では場所によって言葉が違うのである。そのため、場所によって異なった通訳をお願いし、その人達がそれぞれの土地の言葉を介してはじめて私は村の

人々と意見の交換ができるのである。外国人が異文化を理解するのはその意味では大変である。

他方で、外国人研究者であるからこそかえって大胆不敵に聞ける事柄もある。例えば今回の調査では地方の政治家と一般の人々との関係を両方の立場から理解しようとしている。そのため、しばしば村の人達が、「政治家はおうおうにして信用ならぬ」というと、私は「それは政治家の多くは腐敗していると言う意味ですか?」と尋ね、村人の発言を確認しようとする。同じ村の人同士であればその人間関係を考慮するためにあまり直接的に表現できない質問も、その村に属さずその土地の人間関係に直接関与しない外国人研究者であるからこそ聞けることもあるわけである。

このような問いに対して、多くの場合村人は笑いを隠さない。なぜなら、普段思っていることを、あまりにズバリ言われてしまうからである。実はこのような笑いが私にとっては重要な意味を持つ。会話のやり取りの中で、実際の発言の内容も重要であるが、その内容が表明された状況が、その内容を解釈する重要なヒントを提供しているのである。村人の笑いは、「そうなんだけれども、そこまで言ってしまうとなあ、どうしよう」という感情を表しているように私には思える。このやり取りの例に限らず、いろんな局面で、村人の様々な感情は表現される。そのため、村人と会う際の状況設定は、私にはきわめて重要である。落ち着いた雰囲気の中でないと、このような感情は安心して表明されないからである。笑い、ためらい、怒り、それらすべては私にとって貴重な研究の「鍵」である。この鍵を有効に

使えれば、研究の成果も上がるであろう。研究者としての醍醐味とは、村人がこのような素直な感情をよそ者である私と共有してくれているというその場にあるのかもしれない。お互いがお互いがある程度信頼し、受け入れ、そして感情を分かち合う。そのことによって、外国の研究者を一定の意味で受け入れてくれる。これは恐らく村を訪ねたときに得られる研究者としての「快感」に近いのではなからうか。

### 果てしない探究

このように安易に考えていると、同僚のウガンダを研究するウガンダ人研究者からしばしば批判される。ウガンダ人研究者と外国人研究者の間には実は奇妙な関係が見受けられる。ウガンダ人研究者はこの国を歴史的視点でとらえ、政治制度にせよ経済改革にせよ現在の政策をしばしば批判的に見ている。言論の自由が比較的確保されているウガンダでは政府批判は頻繁になされ、現状に不満なウガンダ人研究者ほど批判的立場をとりがちである。他方私を含む外国人研究者は、ウガンダをアフリカを含む他の発展途上国との比較でとらえ、ウガンダ人研究者よりも現在の政策の有効な側面を見ようとし、より好意的な結論を導くことが多い。ウガンダ人研究者との議論はしばしばこのような立場の違いを、浮かび上がらせる。そのような議論は一方で刺激的であるが、他方で終わりのない泥沼の議論と化する危険性もある。

そのように考えると本当に学問の世界は奥が深く、また深い。

そして本当の学問は大学の研究室の中にはない。学問の世界も、現実の世界も際限なく広い。そしていつしかその広い世界の片隅にアフリカがしっかりと位置づけられるようになることを願っている。そしてその願いがかなうように、私自身もこのアフリカの大地を一步一步あゆみたいと思っている。